

頒布会は朝からなので妻と前泊して臨ことにした。晩飯は地元の牛肉に十勝ワイン五種飲み比べセットということで気分を盛り上げる。それにブドウの生垣の仕立て方を見ておくということも役場にある生垣の構造、スケールなどを実測したり写真に収めたりした。頒布会は九時からだけど八時半に行くともう人の列ができていた。苗は「山幸」「清舞」の他、「清見」の三種。事前にご近所さんと相談し、それぞれにブドウの生垣をつくってみようということになっていたのでも、それにきつかけをつくってくれたMさんへのプレゼントも加えて、「山幸」七株、「清舞」四株、「清見」一株をいただくことにした。

私が購入の順番を待っている間、妻は誰かと話している。どうも地元新聞の記者のようだ。ちよつと悪い予感がして購入後、話の輪に入ってみると記者曰く「奥さんから聞いたらワインを造られるんですって？」と。妻の気持ちをつなぎとめておくためのホラを真に受けて、それも新聞記者に話すなんて。あわてて、それは冗談で生垣用に購入して、もし収穫があれば生食でもいけるそうだし、ジュースやジャムにして良いかと思っていると訂正した。その後が気になつて帰ってからしばらくしてその新聞のインターネット配信にアクセスすると「町でブドウの頒布会に多くの方が来られて賑わう。遠くK市から来られた石塚さんは・・・」とあるではないか。その先を読むのは有料ということではなつたが、その先を読むのが怖くてなかつたことにした。数年後に国税の方が無駄足を踏まないことを祈る。

苗は、ご近所やMさんにたいへん喜ばれ、さつそくそれぞれで植えて「三年後が楽しみだね」と笑顔をかわした。七十過ぎの老人たちが、三年後が楽しみだと言ひ合うのも良いものだ。それからは、時々「散歩の途中」とか「元気にしてるかな」とかの理由をつけ、互いのブドウの生育を確認し一喜一憂すること。それでもMさんは我が家のブドウに大きな芋虫がいるのを見つけてくれたり、施肥のタイミングなどいろいろアドバイスをもらえて感謝している。秋になり選定にも気を配りながら、ネズミやスカシバの幼虫などから苗を守りブドウの実がなるのを楽しみに待とう。

そうやって日々、ブドウの成長を観察していると、敷地のなかの見え方も違つてきた。そう、そこら中にヤマブドウが生えていたのだ。灯台下暗しというより、ブドウを見る「目」ができてきたという方が正しい。いままで笹藪の中に埋もれていた、高い木に絡みついて地上からは気がつかなくなつたりしたのが見てわかるようになった。そのままでは勿体無いので、笹藪から引き出し支柱を立てて第二第三のブドウの生垣をつくった。あちこちにブドウの房状の花が咲いて、三年待たずに収穫が楽しめるかと期待された。ただ、だんだん様子がおかしくなりその花が枯れていくではないか。いろいろ調べたらヤマブドウには雄株と雌株があり、私が見つけたのは全部雄株で実がならないことがわかつた。その落胆ぶりを見かねたのかMさんが高いハシゴを持ってきて高い木に絡みついた雌株を地上に下ろしてくれた。

